

平成 26 年度 「第 9 回 松戸市子ども・子育て会議」 会議録（要旨）

1. 日時	平成 27 年 1 月 22 日（木） 18 時 30 分～20 時 30 分
2. 場所	松戸市役所 議会棟 3 階 特別委員会室
3. 出席者	<p><委員>（50 音順）</p> <p>飯沼委員、石井委員、石田委員、伊藤委員、海老原委員、大川委員、大熊委員、沖委員、神谷委員、斉藤委員、鈴木委員、富永委員、奈賀委員、永瀬委員、成瀬委員、西委員、野中委員、文入委員、細井委員、森田委員、山口委員</p>
4. 傍聴者	4 名
5. 議事	<p>（1）地域型保育事業の利用定員等について</p> <p>（2）松戸市子ども総合計画(案)について</p>
6. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・パブリックコメントの実施について ・次回会議予定 来年度

1. 開会

2. 議事

○会議の成立

（事務局）

・総委員 22 名、21 名出席（欠席 1 名）。会議の成立を報告する。

○本日の傍聴の受け入れ

（事務局）

・4 名の方の傍聴の申し出あり。入室を許可する。

○議事の録音について

・議事録作成のため、了承。

（1）地域型保育事業の利用定員等について

（事務局）

資料に添って説明。

○意見交換

（石井委員）

市は小規模保育事業を進める方針であると受けとめているが、問題は 3 歳児の受け入

れである。一時預かりによって、3歳児から預かる体制づくりを考えている幼稚園もあるときくが、長い利用者は12時間保育のため、保育園での受け入れ体制をつくるか、認定こども園や幼稚園で保育園並みに預かれるようしなければならない。3歳児の行き場がなくならないよう、充分配慮して小規模保育の設置をすすめていただきたいと願っている。

(会長)

小規模保育事業を進めるにあたり、今後の見通しをきちんとたてて、3歳児の受け入れ体制づくりに取り組んでいただきたいとの要望である。

(石田委員)

子育てコーディネーターの立場としては、保護者から小規模保育後の3歳児の受け入れ先についての質問を多くうける。体制づくりも含めて事業を進めていると思うが、利用者にとっては不安が大きいため、説明がうまくできる状況を作って欲しい。

(事務局)

小規模保育事業は平成27年度当初に8施設設置の予定である。

卒園後は保護者の希望により別の施設に移るが、調整の結果希望通りにならない場合は、連携施設で責任をもって必ず受け入れるということが前提になっている。また、長時間の預かり保育に取り組む幼稚園が増えており、幼稚園でも3歳児を受け入れる環境ができていると思っている。

(3) 松戸市子ども総合計画(案)について

(事務局)

資料に添って説明。

○意見交換・質疑応答

(大川委員)

P35の放課後子ども総合プランの策定の運営基準による体制整備のところ、郊外施設の学校内への移設を推進しますとあるが、歴史のある古い放課後児童クラブで、現在の場所が保護者と児童にとって利用しやすい恵まれた環境にある場合でも、学校内への移設の対象になるのか。新しい制度を取り入れながらも、長い年月続いた伝統も大切にできたら良いと思うがいかがか。

(事務局)

校内施設の基本的な考え方として、児童の安全確保がある。校外への移動の間での交通

事故、その他児童の安全確保を重視し、これまでも校外施設については校舎の敷地内等への移設を図ってきた。今後の計画についても同様の考え方である。

(森田委員)

P100の人口の設定のなかで、前回、推計人口はH27からH31にかけて子どもの数が2000名ほど減っていくという推定があったが、今回は逆に目標人口が2500名ほど増えているので心配になっている。H31年度になれば待機児童は少なくなるのではないかと考えていたが、目標値をみると逆に増えていく。毎年数箇所の保育所の整備は進んでいるが、それでも足りなくて小規模保育所の開設をしており、それでも間に合わないのが現状である。目標人口が実現するかは別として、施設整備ができるのか。クラブについて、6～11歳児も結構な数となっているが、学校の整備も進めていけるのか。私どもの放課後児童クラブは学校の余裕教室をお借りして運営しているため、お借りしている学校の教室が足りなくなれば運営ができなくなってしまう。財源があれば、学校外に独立した施設をつくれるのだろうが、現状では難しい。余裕教室がなくなれば運営ができなくなってしまうので、その辺りの施設整備はどのようにお考えか。

(会長)

推定人口とこれから松戸は発展するという意味の目標人口との間で、施設整備の問題を考えたとき、どのような考え方が妥当なのか。ひとつは保育所等の待機児童の問題、もうひとつは放課後児童クラブの問題である。

(事務局)

人口の動向を重視しながら計画の修正を検討し、確保策についても施設整備を含め現状精査して考えていきたい。

放課後児童健全育成事業については、P112をご覧いただきたい。前提となる考え方として、今後は放課後児童クラブと放課後KIDSルームを一体的に推進していく。6年生までの利用拡大が見込まれる中で、放課後児童クラブだけではなく放課後KIDSルームの整備をあわせて進めることで、保護者の就労に係らず小学生に放課後の居場所を提供できる体制を考えている。したがって放課後児童クラブに加え放課後KIDSルームの整備により、合わせて需要に対応していきたいと考えている。

(飯沼委員)

P82の待機児童の解消について、小規模保育事業、幼稚園の預かり保育、認定こども園が非常に重要だ。待機児童を具体的に解消するためには、小規模保育事業の連携施設となることも含めて考えると、地域の小規模保育事業、幼稚園と保育園がお互いに実態を知らなければ話し合いもできない。また認定こども園についても、幼稚園と保育園の良いとこ

ろだけをとって認定こども園にしますと簡単に書いてあるが、実現させるのはたいへん難しいことである。認定こども園を推奨する以上は、保育園と幼稚園の違いをしっかりと把握するために、お互いにもっと保育園と幼稚園の実態を情報交換しなければならない。P33に幼保小の連携が大事だとあるが、幼保小の情報交換会をどのように進めるのか。その辺りを大事に進めていかなければ、健全でバランスの取れた子どもは育たないと思う。どの程度まで情報交換の方向を考えて書かれているのか教えていただきたい。

(石井委員)

放課後児童クラブは、国の方針で一施設の定員はおおむね40名となっている。松戸市では100名を超える児童を抱えている放課後児童クラブもあるため、おおむね40名といわれている考えをどうしていくか、今後の方向づけを出していただき、放課後児童クラブの方向性と幼保小連携のあり方についても示していただきたい。

(会長)

放課後児童クラブの方向性、幼保小連携の具体的なあり方、重点項目の再度の確認について、事務局にお願いします。

(事務局)

放課後児童クラブの40名については、クラブの定員が40名ということではなく、40名を集団の単位にするということである。クラブのなかで集団をどう形成していくか等、基準を守っていくことを考えて進めていく。

幼保小の連携については、昨年度から幼保小が連携し子どもの育ちを支えるという狙いで情報交換会を開始している。昨年度は2箇所だが、今年度は4箇所に増やして行っているところである。将来的には9つの支所管区で幼保、小学校も連携して子どもの育ちの情報交換をし、共通の課題を探っていこうという取組みを進めていこうと思っている。回数に関しては年に2回以上を目標としているが、地域の課題によって回数等は充実させていきたい。現在は公立保育所が核となっているが、地域の保育所がつなぎ手として役割を果たしていきながら将来的には自主的に開催できれば良いと思う。

(会長)

放課後児童クラブと幼保小の連携以外のご意見あるか。

(海老原委員)

P77の妊娠・出産・子育てまでの切れ目のない支援のところだが、妊娠して産婦人科に8ヶ月くらい定期的に通っている間、松戸の子育て情報が提供されていないのが実態である。赤ちゃんを産むお母さんが地域の情報を得るのは、母子手帳をもらうときという、妊

娠のとても初期だけで、その後の部分が不足している。子育てガイドブックの配布や地域ごとの施設の情報が手に入るような、情報を欲しているときに適切な場面で情報が得られるような工夫をしていただきたい。マイ保育園マイ広場というのが今回掲げられ、このようなことも地域情報を得る大事な場面であるので、妊娠期に推進していただきたいと思う。P98では3地域に区分されているが、地域ごとの課題が計画書にはあまり書かれておらず、単にそれぞれの事業の目標値や施設数が書かれている。地域ごとの課題とその達成が利用者にとって最大の評価となるので、今後評価をしていくにあたり、地域ごとにこの施設が足りないからこのような形で達成できたというような、地域ごとの課題の抽出と課題の達成についても、この計画の内容と推進の場面で考慮していただきたい。

(会長)

切れ目のない支援の充実と、地域の課題をいかして推進し評価していくこと、というご意見である。

(鈴木委員)

P103の確認を受けない幼稚園の数について、H27年度が9,328人、H28年度が3,645人となっているが、数字の根拠を説明いただきたい。

(事務局)

本年度の夏に市内の幼稚園40園に意向調査を行った。H27年度には制度に移行しないという意向の幼稚園、さらにH28年度には特定教育保育施設に移行する意向の幼稚園、そういった新制度の意向調査から算定した数字である。幼稚園の定員は10,000人を超えているが、利用人数については9,328人となっている。

(石田委員)

P36の放課後児童支援員の研修の実施について、放課後児童クラブと放課後KIDSルームの指導員の研修と理解しているが、小中高生の居場所づくりや、こどもの遊び場や児童館機能施設の整備のところで、そこのスタッフの研修もとても大事だと思うので、放課後児童クラブと同じような形で一緒に研修をお願いできないか。

(事務局)

国では子育て支援員という研修制度を来年から進める予定だが、計画の策定の段階では明確になっていなかったため、計画の記載として放課後児童クラブの指導員と補助員の部分と、地域の人材としての子育て支援員との部分に分かれている。今いる指導員、おやこDE広場や、子どもの遊び場等で支援をしている方達の養成については、P96の子育て支援員の認定研修のフォローアップと現任研修を行う予定である。

(富永委員)

障害福祉に関しては養育支援コーディネーターの配置が県から推奨がされていると思うが、松戸市内にはいるのか。ぜひ松戸市でも養育支援コーディネーターの活用もお願いしたい。

(斉藤委員)

P38の児童館機能をもった施設の拡充と事業の充実を図りますと記載され、その下にも児童館機能施設の整備とあるが、具体的に見えてこないのご説明いただきたい。児童館機能とは一般的に言われる児童館であるならば、専門職としての児童厚生員が必要であるので、どう考えるのか。

放課後子ども総合プランがあり、放課後児童クラブ、放課後 KIDS ルーム、児童館、冒険こどもの遊び場とすべて子どもの居場所に関係しているのだが、どう整理してどうしていくのか方向を明確にしていきたい。それぞれ違ったニーズで生まれてきたものを一緒にしてころがしていけるのか、示していきたい。

人口増加を見込んで修正をかけているが、実際には増えないかもしれないので、それを見て調整をしていくという発言があったが、これはニワトリが先かタマゴが先かではないが、人口を増やそうと思ったら施設整備が先であり、増えたからやるということでは違うのではないか。

(会長)

人口問題のご意見として、児童館、こどもの遊び場、放課後児童クラブ等のすべての方向性、その職員の問題も含め事務局から説明をお願いしたい。

(事務局)

児童館機能との表現について、今まで松戸市では児童館増設の方針はもっていなかったが、本計画のなかで、子育て支援施設を統括するような形の児童館機能をもたせた施設を3区域に1ヶ所ずつ位整備し、そのうち1つを基幹的な施設として、まわりの子育て支援施設を統括していけるような機能をもたせたいとして、児童館機能をもつと表現している。

(神谷委員)

児童館という言葉は始めて出てきた。今までの松戸は児童館をつくらないという方針だったので、児童館的機能とはいえ素晴らしい。つくるのであれば中身をきちっと検討してつくってもらいたい。きちっとした計画がなければ総合的な子育て支援を行う児童館にはなりえない。そこには部屋の機能、仕事としての機能、そのための専門職の配置、三点セットとしてでてこなければいけません。ぜひその計画を怠りなくやっていただきたい。

(会長)

事務局から 3 地区の児童館の基幹型というかなり大きな構想が出たところで、今後さまざまな意見を取り入れて進めていただきたいという要望意見でまとめてよろしいか。

では、松戸市子ども総合計画(案)を踏まえて、「地域の子育て力を上げるために私が今後できること」について、全委員の意見をお願いしたい。

(飯沼委員)

幼児教育と国際交流に携わっているため、この2つを努力したいと思っている。3～5歳の幼児教育をしっかりと行いながら保育的部分では保育園と連携をとり、0～5歳までの子どもが小学校にスムーズに行けるように話し合いをしたい。国際交流については、この総合計画にたくさん掲載があり、P129からの関連実施事業一覧にも国際交流協会の名前がでているところでもあるが、できるだけ小さい頃から異文化理解をする、いろいろな外国の方と会う、こういうことを進めていけたらと思っている。私は、小さいときから、3歳児から外国人と会うことは楽しいと感じられる社会にしなければいけないという志を胸に、40年前に幼稚園を始めた。国際交流に命をかけているが、なかなか浸透しない。しかしながら国際交流協会は公益財団法人になり、事務局も活発でいろいろなプログラムも用意されているので是非ご利用いただきたい。

(石井委員)

妊娠中からの支援を大事にするとよい。出産後のイメージができるよう、妊娠中から子育て中の親子とのふれあい交流を行うなど、親子に触れ合える機会を作りたい。おやこDE広場などでのふれあい交流は、年6回とは言わず、毎日でもいいくらい大事なことである。松戸の小中高生の問題については、少年センターの活発な青少年活動が大事になると思う。

(石田委員)

乳幼児からこども館の中高生まで幅広い支援をしているが、おやこDE広場とママパパ学級との連携で妊娠中からおやこDE広場や保育所を知ってもらい、妊娠中から情報提供できるようにしていきたい。子育てコーディネーターとして、たくさんの地域の方に理解してもらおうことが私にできることだと思う。情報交換会などで、子育て機関の方たちと顔の見える関係でつながり、おやこDE広場のネットワークを使いながら、松戸市は全地域で子育てを見守っていると発信していきたい。

(伊藤委員)

民生児童委員は、地域の住人の一員として社会福祉を中心に様々な相談支援活動をして

いる。なかでも私たち主任児童員は子育てや子どもの発育、母子保健や子どもに関する問題等において相談に応じ、機関との連携支援にあたっているが、各地区で子育て支援として、おやこDE広場にも多く関わっている。これからも、子育て中の親子が気軽に集えて総合交流ができる、子育ての不安や悩み、相談できる場所を提供することで、地域、身近な場所での情報提供をポイントとして活動していけたらと考えている。子育ての問題は地域の問題、地域の住人が共有して地域全体で子どもを育てる意識をもっていただけるように働きかけをしていきたい。

(海老原委員)

今妊娠中である。一人目のときは赤ちゃんも抱っこしたことがない状態で産後のブルー、育児休暇、仕事の復帰と走ってきたが、次は少し余裕をもって自分の経験を人に伝えつつ、松戸市で子育てがしやすいためにどうすればよいか、いろいろな広場や児童館へ行って、考えながら情報発信していきたいと思っている。生活圏ということを考えてみると、自分が住んでいる場所の半径 5 キロ以内の圏内で利用できる、そういう情報が一番重要で大切だと思うので、松戸駅周辺の実際利用しやすい子育て情報を蓄積して友人やママ友パパ友と共有したりしていきたい。

(大川委員)

今、子ども会の意義が社会の人たちに知られていないという現状がある。子ども会は同じ地域に住んでいる異年齢の子ども達が地域の特色をいかしながら約束や決まりを決めて、さまざまな楽しい活動をするところ。活動を通して思いやりの心や責任感、自制心が身についたり郷土愛に目覚めたり、想像力が生まれたり、体力が向上したりする。少年期の豊かな体験は自発性、活動性を身に着けることができ、様々な発達課題を達成していく。子ども会活動は力強く生き抜くための貴重なチャンスである。今年度、松戸子ども会育成会連絡協議会は創立 50 周年を迎えた。その実績が評価され、昨年 11 月に県教育委員会から教育功労者として団体の部で表彰していただいた。勉強に追われる子ども達にとって子ども会の存在は忘れられる一方だが、これから先も子ども会活動が続いていくよう、子ども会という貴重な体験の場があることをまわりの人たちに伝えていきたい。

(大熊委員)

歯科医師会として、子育てに関しては行政と連携し、妊婦検診に始まり 1 歳半、3 歳検診、学校検診を実施している。検診に来る子どもの口内は 20 数年前に比べ綺麗になりとても良いが、検診にこられない親子、とくに子どもの口内の状態は良くないであろうと懸念している。受診率を高めるよう行政にお願いするとともに、松戸市では中学生までは医療費が 200 円若しくは無料の制度があるので、そういった恵まれた制度を利用できるようフォロー等お願いしたい。

(沖委員)

人材育成ということが計画書にたくさんに載っており、たいへん良いことだと思う。子育てで一番心配しているのは、その子どもと向き合っている大人である。大人をどう人材育成し教育していくのか、難しい問題がある。実践する段階で配慮して、どういう支援員、子どもと向き合う大人を育てていくのか、肝に銘じてやっていただきたい。何かを思い、何かを考え、何かを感じられる大人、そういう大人が子どもと向き合うべきだ。

(神谷委員)

沖委員のお話のように、子どもたちの問題を支えるのは指導者だと思う。その指導者がちゃんとしていれば、子どもたちはこの松戸に残っていく。人口減の話もあったが、松戸を出て行く子どもたちを止めるには、松戸っていいなと思える年齢、小中高の時代に豊富な体験ができるよう育成が必要。そこにチャレンジしたいと思い松戸に引っ越してきたので、やれる限り、歳をとっても、頑張って支え合って続けていきたい。

(鈴木委員)

子育ての団体の方々が交流をして、子育てしやすい松戸にするための議論をもっともっとしていけば、いろいろな帳尻が取れていくと思う。子どもを教育する、預かるという視点だけでなく、親への支援という視点から、育ての心を大切にしながら、親学的なものを各幼稚園でも保育園でも力を入れられるようにしたい。

(富永委員)

「子どもは社会の宝です」という言葉がある。困難な事例が起こり自分のところにきたとき、そこに立ち返ることにしている。社会の宝を松戸にもたらしてくれた保護者に、ご両親に、いつもありがとうという気持ちで接することに立ち返らなければならないと思う。虐待やネグレクトなどが心配になるケースも多々あるが、松戸の子として宝として、皆さまと連携して支援していきたい。障害福祉のサービスを利用するには、利用者は1割負担で、あと9割は税金でまかなわれている。そのサービスが大きくなることで障害者は社会の負担になるという考え方をもたないように、宝に対していくらでも払うぞ、という気持ちで税金を払っていきたい。

(奈賀委員)

P T Aとしては、保護者の今関心のあることを吸い上げて講演会を開催し、地域どうしの学校とのつながりを評価していく。そこで得た問題点はみんなで共有し、学校とも連携をとり、必要であれば校長先生方と密に連絡を取りつつ不安や不満を取り除いていきたいと思っている。子育ては楽しいな、松戸で小中学校に通わせて良かったな、と思える保護

者が増えるような活動をしていきたい。

(永瀬委員)

おやこ DE 広場で相談活動をしている。広場内で相談を受けるほか、託児をつけて個室でのカウンセリングも行っている。私は大学で看護学と教育学を学んだあと保育士の養成教育に携わり、学校や保育園の勤務も経験し、カウンセラー資格取得後は相談の現場で修業を積んできた変わりダネである。支援者の研修会等で講師を務めると、子育て支援の現場を知る者の視点でからだと心のお話をするためか、主催者から「この話を聞きたかった。いろいろな講師を呼んだが、いつも何か違うと感じていた」といった趣旨の感想をうかがうことがよくある。子育て相談は現在、保育士や保健師助産師、カウンセラーなどが行っているが、カウンセラーは心理には強いけれど授乳や排泄などこまごました育児の相談は苦手だったり、医療の専門家のかかわりが心理的な配慮に欠けていたり、「子育て」という広範囲の相談に自在に対応できる人は大変少ないのが現状。子育て相談は、食事の悩みをていねいに聴いていくうちに「イライラして叩いてしまう」という話になったりすることも多く、保護者が日常的な空間で気軽に相談できる最前線の現場には、保育・医療・心理がからみ合った領域をカバーできる「子育て相談のプロ」が必要である。それができるのが、私の希少価値だと思っている。沖委員のお話にあったように、子どもを育てる親を育てる、親を育てる支援者を育てる、それが今、最も重要な課題。広場での相談活動の充実と支援者の研修、スパービジョンなど、私らしい所でがんばって行きたいと思う。

(成瀬委員)

松戸市子ども総合計画は、うまく進めば質的にも量的にも素敵な計画である。学校の立場としては、教育のひとつの重点として子ども達が生まれ育った地域を知り、地域に誇りをもてる子どもを育成したいと常々思っている。そういう中で地域の子育て力を上げるために、地域と顔の見えるつながりを大切にしていきたい。その為に3つのことがある。1つ目は地域に学びの場をつくり、地域の人材を活用して、教育の中に取り入れたり、飛び出したりすること。子どもの知的好奇心を誘発するような質が高く質の充実したものがつくり上げられるように、学校の立場での支援や連携が大切。2つ目は教育を支える放課後の学び。いろいろな意味で問題を抱えている児童を、学校だけでなくサポートできるような放課後 KIDS ルームの充実のための支援、活性化の協力。3つ目は子どもの知恵を育む体験活動。学校内の体験活動は限りがあるので地域の行事や活動に飛び出して行けるような連携をもつ学校教育での支援を行いたい。

(野中委員)

私は、子どもの環境を守る会 J ワールドにて、主に小中高の子どもと多く関わっている。基本に子どもの力、家庭の力、地域の力とあるが、家庭の多様化により、家庭で補えない

ことを親の代わりになって子どもを支えることができる地域の力が重要になってきている。高校のPTAの研修会に出席したときに、中学校で不登校やイジメがおこり、高校で少し落ち着くので、犯罪の予備軍は中学の時だというデータを見た。小学校から中学校への連携はあまり言われていないし難しい部分ではあるが、小学校のうちに地域できちっととらえ、そこから中学へ連携することが大切なことだと思う。中学になると部活や勉強で地域に出てこないという問題がある。閉鎖された学校の世界で行き場のなくなった子どもが、不登校やイジメに発展してしまうのではないか。地域のボランティアに中学生や高校生を巻き込んでいく仕組みづくり、地域力向上に中学生や高校生を、与えるというより一緒にやっけて育てていく立場になりたいと常々思っている。

(文入委員)

現状は非常に難しい問題があるが、この計画が実現すれば素晴らしい社会になっていると思う。社会福祉協議会は市内15地区のうち14地区で子育てサロン等を開催している。今は1歳から未就学児が対象で、そのお子さんの保護者と悩みや相談や情報交換をしたり、保健師を招いて講習など開催したりしている。

そのサロンの対象を広げ、小中高生も巻き込んだ活動ができる体制づくりの仕掛けをしていきたい。社会福祉協議会のイベントでは小学生から大学生までの連携はできているので、ふだんでもその体制ができる仕掛けをしていきたいと思っている。社会福祉協議会でもそうですが、地域の単位は各町会自治会である。私は町会に関心も期待ももっているので、町会や自治会で子ども部をつくらうという提案をしていきたい。子ども部を実現させて地域の子どもと共に育つ町会にしたい。私は自分の町会で子どもが生まれたときにお祝い金を差し上げるという実績もつくった。今後も頑張っていきたいと思う。

(細井委員)

今後私ができることを3つ考えた。1つ目は、今行っている保育を充実させ地域の子育て力を高めること。2つ目は、市民アンケートのニーズ実現の準備をすること。3つ目は、地区ごとのネットワークを築くこと。

1、保育所として今保育所を利用している家庭や一時預かり事業を利用している方の子育て力が上がることが地域の子育て力を高める。保育所は基盤となる。職員全体が利用者の気持ちを理解し支援する技術を上げることができていれば、今後の地域へのアプローチや子育て力アップを具体化する質の良いプランの実現になっていく。これは人材につながり、人材育成だと思う。牧の原保育所でも通常保育、一時預かり保育事業、統合保育、子ども発達センターの通園児との交流、子ども発達センターの専門職との連携、施設開放、赤ちゃん広場では保健センターと協力して遊びの提供、相談の協力をとっている。その他ボランティア、中高生の体験学習の受け入れ、世代間交流として近隣の施設や学生、大人との交流を実施している。保育所と接点をもつ市民が毎年いる。保育所を理解し、子どもを理解

する市民が増えるということが地域の子育て力につながる。今保育所で実践していることをしっかり継続して、松戸市子ども総合計画の推進事業、重点的取組みにつなげていく。

2、市民アンケートのニーズ実現の準備をする。アンケートデータでは8%であったが、初めて自分の子どもをもつ前に赤ちゃんとふれあえる機会をもつ体験を増やして欲しいというニーズがある。マイ保育所・マイ広場の実現に向けて地域の公立保育所としてニーズに答えられる準備をしたい。

3、地区ごとのネットワークを築く。牧の原保育所は常盤平地区にある。身近にある幼稚園、保育園、子ども発達センター、保健センターの保健師や民生児童委員との連携は欠かせないと考える。子育てコーディネーター事業が専門機関をつなげることを期待している。地域の関係機関と連携を築くのは保育所の役割。地域の特性にあった専門性が発揮できる機関として実践していきたい。

(森田委員)

先ほどP100の人口のところで質問をしたが、決して子どもが増えることを歓迎しない訳ではない。小子化の一因が待機児童の問題であれば、子育ての機関が不足しているということがあるので、目標値を上げるのであれば施設整備をしっかりと明記したほう良いとの考えで発言した。地域の子育て力を上げるため、私のところは保育園なので日常的に子育て支援をしている。今の保育園は育児相談、施設開放、地域の交流、行事があるたびに近隣の方を招き子ども達と一緒に遊んでもらっている。10数年前からは、お招きではなくこちらか出かけて交流をしている。地区の町会のお祭りや盆踊りなどへ、1日出張して子ども達と地域の方と交流となるとたいへんな作業だが、そのような活動をしていると保育園の行事に地域の方が来てくださり、たびたび保育園に顔を出してくださる。子育て談義もできて、関心はずいぶん高まっている。この事業を継続していきたいと思っている。

プライベートでは隣の小学校の児童の登下校の登校指導をメンバー15、6名で10数年行い、朝夕登下校時に危険な場所に立っている。日常的に毎日顔を合わせると子ども達も挨拶をしてくるし、保護者にも関心をもっていただける。子育て中の親だけでなく近隣の方たちも協力してくれて、地域の子どもへの関心が高まってきていると実感している。このような活動も継続していきたい。幼保小の連携について、一昨日保育園協議会の役員と幼稚園連合会の会長、役員の方と自主的に懇談会を開催した。最初だったので細かなことまで入り込めなかったが、今後、松戸の子育ての細かなテーマをもっと定期的に続けていきたい。

(山口委員)

幼稚園の立場から思うことは、地域に開かれた幼稚園を目指して、地域から支えられる、地域と一緒に育っていくことが必要だと思う。子育てだけでなく何かあった時に助け合えることが必要。幼稚園の保護者は働いていない方が多いので、お迎えとき1~2時間、園庭

でおしゃべりをしている。育児の悩み、仕事、家庭内のことなど、自主的に子育て支援をし合っているような状況である。子どもを目で追いながらも安心して自分達の時間を過ごせる場所があるのは理想かなと思っている。お母さん達にとって居心地のよい場所になっていると思う。

松戸青年会議所として今後私にできることは、子育て支援では3つある。子どもへの働きかけ、親として支えること、地域との連携である。青年会議所は利害関係がなく色々なことができる団体なので、いろいろな団体との連携の部分で、子ども達の事業をつくる中で、親世代とも、子どもを見る目、子どもに向ける目を育てていきたい。

(斉藤委員)

児童館が子育て支援施設の基幹型で皆をまとめる機能をもつということで、いろんな関係機関をスーパーバイズしたり、ネットワークをつくったり、地域のいろんな方を巻き込むコミュニティーワークができるような人を配置したり育ててもらったりして、進めていきたい。地域は子どもからお年寄りまでいろんな方がいるので、行政としては縦割りにならないよう、そこを踏まえてやっていただきたい。

(会長)

各委員から重みのある内容をいただけて嬉しく思う。松戸子ども総合計画(案)は今日で意見を頂く最後になる。子ども力でつながる未来ということで、子どもが輝くために一番大事なことは何かと考えると、親や大人が輝いていて、笑顔で、松戸が好きでなければ、子どもの環境として最悪になってしまう。子どものみならず、まずは市民が松戸を好きで、楽しく過ごせる街だと思えることが基本だ。松戸子ども総合計画の実現は、行政の力を発揮しどころである。連携や交流、それぞれの力を出し合う、知り合うなど同じ気持ちからたくさん意見がでて計画案ができ4月から新しい制度として動き出すので、今後ともお互いに力を出し合えば良い。その核にいるのは行政。目標人口という大きい目標値を立てたので、松戸市として子ども総合計画に力を注ぎ、縦割り行政などと言わせない切れ目のない連携をバックアップして、人材も育成もして大人が幸せになって子どもも笑顔で幸せになって欲しい。私にできることは、人材育成。また、現場やおやこDE広場にもいるので直接支援もできる。

各委員からいただいた意見は、ぜひ子ども子育て総合計画にメッセージとして盛り込んでいただけたらと思う。

3. その他

- ・パブリックコメントの実施について
事務局より、資料に添って説明。

- ・次回会議について

本日の会議を持って、平成26年度の松戸市子ども・子育て会議は終了。
次回会議は来年度となる。

- ・子育て支援課長挨拶

4. 閉会